

日本の憑依現象 — 憑き物と「こっくりさん」をめぐる

2025・08・24 公益財団法人日本心霊科学協会 2025 年夏季講座「東西の霊魂」 一柳 廣孝

近代日本において、海外でのモダン・スピリチュアリズムの流行を受けて発生したと考えられているこっくりさんだが、そこで交信する「向こうの世界」の存在は、海外のように死者の霊ではなく、狐を代表とする動物霊とみなされた。江戸時代から続く俗信の影響（狐狸に化かされたという百物語の文脈）や、江戸の町に数多く存在した稲荷社の存在感、近辺でしばしば目撃された野生動物としての狐や狸、憑き物信仰などがその理由とされている。

今回はそのなかでも、憑き物信仰、特に狐憑きについて考えてみたい。それは、こっくりさんに「狐狗狸」の当て字が使用されたことで、場合によってはこれらの動物霊に憑依されるという恐怖が、1970 年代のオカルトブーム下におけるこっくりさんの流行時に至るまで、語られ続けたからである。そもそも、なぜ動物霊が人に取りつくのか。こうした現象は日本固有のものなのか。そこには人と自然をめぐる世界観の問題が隠されているようにも思われる。

1 憑き物とは何か

何ものかが人に取りつくという憑き物は、古代にあっては物の怪がメインで、狐憑きは古代末期に散発的に見られるに過ぎない。それが中世になると狐憑きの例が増加し、近世に最盛期を迎える。昼田源四郎は、近世の憑依について次のような特徴を指摘している。

- (1) 中世まで見られていた物の怪憑き（物憑き）はほとんど姿を見せなくなり、代わって狐が主役となる。
- (2) 狐や蛇だけでなくイヌ神やイヅナなど、憑依する動物霊の数が増える。
- (3) 狐憑きの集団発生例が登場する。
- (4) 中世にも見られた「狐使い」など、黒魔術の事件例が増加する。

なお昼田は憑依現象の役割について「ストレスや攻撃性を発散する演劇空間としての機能をはたした」とし「儒教道徳に支配された、封建的で閉塞的な対人関係のなかで自己の葛藤を処理するには、狐憑きという言説は非常に有効だった。というのも、人びとは共同体のなかに踏みとどまろうとするかぎり、あからさまな相互への攻撃は避けなければならなかったかたである。憎み非難すべき対象は狐であり、狐使いであると、相手へ向けるはずの攻撃性を狐や狐使いという第三者に向けた。そこで一致団結して問題解決にあたるなかで自然に人間関係の修復がなされたという、すぐれて集団精神療法的な隠された機能が「狐憑き」という言説にはあったのではないか」と述べている。（「狐憑きの心性史」、山田慶兒・栗山茂久編『歴史の中の病と医学』所収、1997、思文閣出版）

また、小松和彦は言う。「おそらく、「憑依動物」は、人間の心や社会生活を映し出すために創造されたのであろう。それは幻想のなかに住む特別な動物であって、野山を駆けめぐっている現実の動物ではなく、「人間化された幻想動物」なのである。動物霊といった間接的な表象がまどろっこしくなったときに、直接的に「生霊」という霊がもちだされることになる。」「別の言い方をすれば「人間化しにくい動物」は人に憑きにくいということになる。」「(「憑きもの 解説」、小松責任編集『怪異の民俗学』1巻所収、2000、河出書房新社)

ただし「人間に憑依する超自然的存在＝「憑きもの」に対する信仰は、近代化・都市化による「民俗の伝承母体」としての村落共同体の変容に伴って、急速に衰退し消滅しつつある」(香川雅信「登校拒否と憑きもの信仰 ― 現代に生きる「犬神憑き」」、桜井徳太郎監修・木曜会責任編集『民俗宗教』第5集、1995、東京堂出版)

* 心霊研究の側の見解

「背後霊には、龍神、天狗、蛇、狐狸などの、いわゆる「自然霊」が非常に多い」「これが日本のスピリチュアリズムを欧米に比べていっそう複雑で不可解なものにしている。日本人の霊的世界の最大の特色である。土俗的というか、民族本来の姿というか、日本人の心の奥を覗くとういう景色が見えるのだ。」

「隙あらば人間にとり憑こうと狙っている、守護霊または指導霊としては甚だ信用がおけない自然霊がいる。狐、蛇、狸などで、このうち狐がいちばん多い。「白狐」などと言われて人間に福をもたらすと思われている狐もあるが、霊能者にとっては最も油断のならない存在である。」

「霊能が出はじめた者が必ずと言っていいくらい憑依されやすいのがこの「低級霊」と言われているものたちである」「その中でどうして狐がこんなに多いのか不思議だが、昔から全国津々浦々に稲荷神社があることを思えば納得できないこともない。稲作の吉凶と切っても切れない縁があったのである。しかしそんな行事とはまったく縁がなくなった現代の子女が、トランス状態になると狐や狸が飛び出してくるのは現代の怪である。欧米では自然霊は絶対と言っていいくらい人間には憑依しない。」

「自然霊の活躍による人畜一緒になった世界が日本のスピリチュアリズムの避けて通れない大問題である」「千数百年の間養ってきたわれわれの霊的想像力の世界(霊界とは念や想像力の世界)を、近々百年ぐらいの近代化で乗り越えることなどできないということなのだろう。」

以上、三浦清宏『新版 近代スピリチュアリズムの歴史 心霊研究から超心理学へ』、2022、国書刊行会

2 狐から心霊へ ― こっくりさんの変容

明治20年前後の「こっくりさん」ブーム。

「お傾き」「告理」「狐狗狸」といった名称のブレ。

装置の変容(資料1～3)。紙の上を走らせる道具の変遷。割り箸を追って三叉に結んだもの → 盃をひっくり返し糸底に油 → 硬貨

70年代オカルト・ブーム下における「こっくりさん」ブーム。

中岡俊哉『狐狗狸さんの秘密』(1974、二見書房、資料4) → 「キツネそのものも、キツネを御本体とするお稲荷さんそのものも、それは宗教的、信仰的なものであって、心霊科学とは無縁のものであり、ましてやこうした現象を科学的に考え、究明しようとする若い皆さんは、そのような誤ちを犯すこと、ないし、そのような誤ちに陥らないことを希望する」(210)、「コックリさん、それはわれわれ心霊科学の面でいうところの自動書記(オートマティック・ライティング)の現象なのだ。」(211) → 死者の意識による自動書記は認めるが、狐霊は認めない。

美堀真利『コックリさんの不思議』(1987、日本文芸社、資料4) → コックリさんは交霊術。「交霊術とは生きている人間が霊と交信すること」(12)。「コックリさん=狐=狐つきと考えている人が意外と多いのですが、コックリさんを行って霊がついた場合、動物霊もしくは、人間でも浮遊霊や地霊(ママ)のような低級霊が取り憑いていることが多いようです」(47)、「コックリさんは狐の霊だといわれていますが、狐は動物の中では頭がよく、魔法や呪術などを、巧みに使う霊力があると信じられてきたからだと思います」(50)

1980年代には、こっくりさんからキューピットさん、エンゼルさん、星の王子様へ移行。「少女たちを担い手とした占い・おまじないブームの影響下で形作られた文化」へ。ただし「制御できない神霊の存在感」は持続、増幅。(大道晴香「一九八〇年代の「こっくりさん」 — 降霊の恐怖を払拭する「キューピッドさん」の戦略」、一柳・大道編『怪異と遊ぶ』所収、2022、青弓社)

こっくりさんは何を呼び寄せているのか → 心霊領域をめぐる世界観の反映。人間中心主義的な世界観と、自然との関係性という点でより包括的な世界観との相克。こっくりさんにおいて、今なお狐の存在感が消えないのはなぜか。